



室蘭市医師会の現況

北海道医報通信員
室蘭市医師会 理事
いくた内科クリニック 院長
生田 茂夫

室蘭市医師会は室蘭市、登別市をエリアしております。人口は両市あわせて約15万人です。室蘭市の医師数は人口1万人あたり29.2人と医科大学のある旭川市に次いで北海道で第2位、札幌市の27.9人を上回っています（平成18年度厚生労働省資料より）。

3つの総合病院（市立室蘭総合病院、日鋼記念病院、新日鐵室蘭総合病院）を中心として、周りの病院、診療所が病診連携をして医療圏をつくっています。患者さんは域内を中心として周りの市町村からも、高度の医療を求めて多く集まってきました。反面、この地域からより高度の医療をもとめて、札幌などへ行く患者さんはそれほど多くはありません。

このように恵まれた地域であるはずの室蘭市でも、最近の医師不足は無関係ではありません。リウマチ、膠原病等を専門とする内科医は皆無となってしまいました。安定した患者さんは域内の整形外科医や内科開業医が診ています。しかし、不安定な状態となると苫小牧市や札幌市まで行かなければならない状態です。また、産婦人科医も不足している状態で、3つの総合病院にいたのが2カ所に集まっています。その結果、小児救急や周産期医療がぎりぎりのところで維持されている状態です。その他、神経内科医、皮膚科医なども以前より少なくなっており不足しています。人数の多い内科でも医師数が減っており各医師の仕事量は増えています。

室蘭市のように人口あたりの医師数が多い地域でも、最近の医師不足は無関係ではありません。新医師臨床研修制度が開始されたことも関係があると思います。また、大学医局からの医師供給が減っていることも大きな要因であると思います。このような苦しい状況にあって、地域や周辺の市町村の患者さんからの期待に応えるために、医師みんなで協力していかなければならないのではないかと考えています。



開業して思うこと

室蘭市医師会
おぎの耳鼻咽喉科・アレルギー
科クリニック 院長
萩野 武

私は昨年、室蘭市内に耳鼻咽喉科医院を開院した新米開業医です。今回執筆を依頼され、その趣旨のとおり開業2年目の現在の心境について少し書いてみたいと思います。

私は室蘭市内の病院での勤務経験は無く、全くの落下傘開業でした。したがって、開院まではもちろんのこと、1年4ヵ月程たった今でもいろいろな面で悩みは多く、不安な日々を送っています。開業医の諸先輩に相談しますと、ほとんどの先輩方から「開業医とはそんなもんだ。気分転換ができる夢中になれる趣味を持つのが良い」との答えが返ってきます。今までいろいろなことに手を出してきましたが、熱中できた趣味というものが無い私はどうしたものかと考えました。激しいスポーツや時間のかかるものは除外し、気軽にそして子どもと一緒にできるものとして家庭菜園を始めることにしました。まず本で勉強し、農作業道具をそろえてと本格的にスタートしたのですが、始めた時期が6月と遅かったことと、今年の日照不足がたたって、現在のところ収穫はほとんどありません。土いじりが多少の気分転換にはなりますが、成果がこのような状況ですので、満足できる趣味には今のところありません。冬になると家庭菜園は無理ですので、また別の趣味をみつける必要がありそうです。今度は写真などはどうかと思い、デジタル一眼レフカメラの本などを読みあさっている最中です。

書家であり詩人である相田みつをさんの言葉に「なやみはつきねんだなあ 生きているんだもの」というものがあります。ひとつの悩みを解決すると、また別の悩みが出てきます。悩みがあればそれを解決するべく人間は頑張れる、悩みが無くなったら生きていく意味が無くなるということですが、しかし私は、悩みはできるだけ無い方が良いと思います。あったとしても、精神と身体に変調をきたさない程度の悩みであってほしいものです。悩みは無くなることはないということを理解し、うまく付き合っていくことを考える必要がありそうです。そのためには悩みを一時でも忘れられる時間が必要です。諸先輩の助言のとおり夢中になれるものが必要で、これからの私の探求は続きそうです。